

III 日本語教育と私

縦と横のつながりを形成し 立体化する教育の可能性

遠藤ゆう子

■ 1. 動機

日本語習得を目指す者には誰しも学習動機があったはずだが、学習過程でそれを忘れる学習者が多いことに驚く。目指すものが失われると、日本語を習得しても表現したいものが存在しなくなる。何故このようなことが生じるのか。

普段、教室では、ある程度決められたパターンに沿って会話練習をしたり、教師が用意した新聞記事を読んだり、教師側にコントロールされた授業が展開されている。学習者を混乱させぬよう、ある程度のコントロールは必要不可欠だ。しかし、こういった授業を重ねていくと、社会から乖離した場所で学習者は教師の用意したものに沿って課題をこなすことに安住しはじめ、自らの創造や思惟が喪失していく。その場の課題が達成されれば「よし、完了、次」とされ、あたかも言語が消費されていくかのようだ。このように学習者は言語を学ぶことで、逆に「語る」ことを失っていくのだ。これは教師側に責任があると感じる。

これを避けるためには、教師は教室という箱の中で展開されたことを教室外で実際運用されることを願い送り出す役目であってはならず、教室という箱の壁をとりはらい、常に学習者・教師・教室が社会の中に位置づけられていなければならない。

社会の中に位置づけるとは、日本語学習の目的・目標を日本語学習の中に置くのではなく、社会の中に見出し、社会のネットワークの中での働きかけが起こる授業展開を設定することである。そのためには働きかけたい内容と働きかける相手が必要であ

る。体験があり、その体験を自ら考察し、そして自ら言葉を選び、発信するという過程を経たとき、学習者は「語る」ことを再生し始める。これが働きかけたい内容である。これは教師からの一方的教授関係から解放されなければ産出されず、授業そのものが「体験→考察→発信」という段階で行われるべきだと考える。そして発信するからには必ず受け手が存在すべきである。受け手のない発信はバーチャルリアリティでしかないからだ。これが働きかける相手である。自らの発信自体も体験となり、またこの働きかけの受け手となった場合も同じようにそれが体験となり、「体験→考察→発信」という段階を経て、コミュニケーションが巻き起こることになる。

教師が学習者にインプットするという視点から解放され、個々人の持つ観察力や発信力を最大限引き出し、本物のことばが絡み合うようなコミュニケーションを創出できる力をつけるべく支援を展開したい。(日本語教育に限らず、全てのことばの教育がそうであって欲しいと願うが、) 私にとって日本語教育とはコミュニケーションを創出する力を持つ主体を育成することである。

■ 2. 対話

2.1. 対話相手について

私(以下:E)は、日本語学校に勤める日本語教師Sと動機文をめぐる対話を行った。Sは日本語学校でプロジェクトワーク授業の担当者であり、学習者の協働による授業を見ている。

対話内容を1. 学習動機、2. 授業活動、という二つのテーマにまとめた。

2.2. 学習動機

S:Eの動機文に、学習者には誰でも学習動機があったはずとありますが、私の周りの学習者は親の強い勧めや、日本で仕事に就けるという半ば誤った情報を得て来日した者などが多くいて、それを動機とするならそれも動機でしょうが、誰し

も本当に動機があったのか、という疑問がまず浮かびます。果たしてこの前提が存在するのかということが気になりました。

E：学習動機を持たない人たちがいるということですね。

S：内在的動機と外在的動機というのがあるのではないのでしょうか。

E：内在的動機というのが、親の勧めとかではなくて、自らの志を持った人たちですか。

S：そうです。内在的動機ならば、動機文という再生もあるのかもしれませんが、学習動機の質、というか、能動的なものと受動的なものがあって、どう主体的に動機を変えていくか、どう内在的動機を作り出すか、という問題があると考えました。

学習動機の捉え方がSと筆者とでは異なるようである。筆者はSの言う「外在的動機」であっても「内在的動機」であっても「動機」と位置づけていて、多少乱暴ではあるが最初の動機そのものは何でもいい、動機の質よりもその想いの強さのほうが学習者を動かすには重要であろうと思っていた。しかし、Sは学習者に「内在的動機」を持たせることが教師の役割であると説く。対話の最中には気付かなかったのだが、このSと私の口にしていた「動機」は異なる視点のものであった。Sの「動機」は学習過程に目が向けられ、筆者の「動機」は学習を始める前の日本語に興味を持ったきっかけに目が向けられている。

S：地域の小学校へ訪問して文化交流をするというプロジェクトワークをしていますが、全員の動機付けができないんですよ。これも授業ですから、どこかでやらされているというか、教師が接触場面というものを作っていますよね。それも、どこか現実的でない、ある意味バーチャルな要素があるんじゃないかと感じるんです。

E：接触場面はバーチャルではないですよ。普段、小学生と接する機会がないから、そう感じるのでしょうか。相手が同年代だったら、そうは感じない？

S：うーん……。いや。語ることというのは、もっともっと主体的なことなのではないか、と。

E：主体的になるのは簡単ではないということ？

S：そうです。

E：私が最初にこういうことを考えるきっかけになったのは、スマップ大好き学習者がいて、日本に来たのはスマップのコンサートツアーについて行きたいから。日本語のペーパーテストではいい点を取るけど、その学習者の考えを聞くとも出てこない。レポートを書く授業ではスマップの生い立ちをインターネットからコピーで提出。この人達は日本語を学んでどうするのだろう、とプリミティブな疑問が私には沸いてきました。話したいことがないように映りました。

だけど、そういう授業をずっとしてきてしまったせいもあるのだと思い始めたわけです。今日は依頼表現を練習しましょう。依頼といえば「何々ていただけませんか」。「何々」にあたる部分はずっと教師が与えてきたわけです。「はい、写真を撮ります」「写真を撮っていただけませんか」という具合に。もう少し長い談話練習をしたとしてもその場面や状況は私たち教師が与えるんですよね。ずっとそんな練習をしてきたから、学習者は自分の考えやアイデアが必要ない。自分の考えが入っていないから「語る」ではないわけです。自分の発想とか意見がない授業を重ねてきたから、いきなり何か意見言えって言ったって、言えないですよね。

S：それはやっぱり学習動機が元々なかったってことですよね。

E：なかった人も、薄かった人もいます。

S：そうか。Eが考えているのは、じゃあ、大規模なプロジェクトワークじゃなくてもいい、ということですかね。

E：そう思っています。そんなに大掛かりでなくても。それに、そんなにみんなが目をキラキラだかギラギラだかさせて主体的にならなくても。学習者が考えていることとか言いたいことっていうのは、教室で言わなくていいのでしょうか、それは置いて、こういう文型はこういう時に使うんだよという指導だけしていいのか、というのが私の出発点なのかもしれません。

どのような状態が主体的と言えるであろうか。みんなの目が力でみなぎるような主体性を持たせたい、主体的にやらせたいと考えて、そのために仕掛けを作ろうとするより、学習者の考えていることを教室の外に置きざりにしないというところから始めてみたいと考えた。Sの「語るというのは主体的なこと」だということも、ここにつながると思う。

E：動機がないと語るのは難しい？

S：動機が生まれれば語り始めることはあると思います。その動機を作らないといけな。日本人の若者もそうですし、自分もそうでしたけど、語りたいたことが元々ある人は少ないですよ。それが無い学習者に対しての支援、共に作っていく、語る内容を作ってあげる手助けも必要なのではないのでしょうか。

私の体験では 18, 19 歳のとき、恋をして日記をつけ始めたんです。読書日記というのもつけ始めました。それまではそんなことはしなかったんですけど、恋愛兼読書日記というのをつけ始めたとき、自分の中で語りたいたことというのが生まれてきたんです。人には絶対見せられないものだけど、自分と語っている。詩を作ったり。そのあと同人誌とか作るようになったんですけど、それはともかくとして、つまり語りたいたことというのは、ないんですよ、母語話者でも、ある時期には。

E：そうか、それは再生ではないですね。初めて出てきたんだ。

S：そうです、再生じゃない。それこそ創出ですよ。語りたいたことが生まれてくるのは、例えば私はそのあと劇団に入って戯曲書いたりしましたが、自分の記憶を書くとなんか自分の世界とか書いて初めて分かるんです。世界があって書くんじゃないくて、書いているうちに世界が出来上がるんです。

E：言語があって思考があるという感じですか？思考があってそれを言語化するのではなく？

S：うーん、まあ、そうです。というか自分はそうであったな、と。ですから、働きかけたい内容や体験とありますが、体験を内面化する必要が非常にあると思います。それが書くとかそういうことなんでしょうけど。体験を内面化することによってできるんじゃないかなって。

E：体験を内面化して初めて語るができる。

S：はい。細川先生の著作に「個」の文化とありますが、こういう体験も語るということも、あくまでも個人的な個人的な内面化をして、初めてリアルなものが語れる。それが日本語、第二言語だった場合に、非常に喜びがあるんじゃないかと。さっきの小学校訪問のプロジェクトワークじゃないですけど、確かにたいてい小学校へ行って交流すると、それはリアルな体験になって、そのあとの手紙*や言

* 礼状を兼ねた訪問後に出す小学校宛の手紙

葉とかは本物なんだけど、それ以前の準備の段階ではあまり真剣になれないのは、内面化できていないからなんでしょう。Eの言う「体験、考察、発信」の「考察」の段階で、かなり個の中に入っていき内面化があって、その後発信するというのが喜びになるんじゃないでしょうか。

体験もたとえ人から与えられたものであっても、自分の内面に取り込んで、主体的に考え直す必要があるのではないかと思います。こういうときの教師の役割って何なんだろうと考えてしまいますけどね。

E：そこを主体的に考えてもらうために教師が何をするかというのが大きな問題になってきますよね。小学校訪問での交流後、その体験を主体的に捉えて内面化していく学習者っていうのは、多く見られますか。

S：できればいいですけど・・・。

E：そういうのは何かに表れるんでしょうかね。小学校での交流後、報告をニュースレターという形にまとめていますよね。あのニュースレターに表れたりしますか。

S：正直、今のところ表れていないですね。何かもっといい工夫はないんでしょうかね。

E：私は最近ホームビジットを授業に取り入れてやっていますが、あれも、体験はあって、何かのきっかけにはなっていると思っていますが、やはりそこで深く考察したり、Sの言う内面化はあまり起こっていないようで、もうちょっと上手い具合にいく方法はないかと思っているのですが・・・。

S：私に内面化する出来事があったように、学習者にも何か・・・。変容というか深みが出るような・・・深化を促すような授業がしてあげられたらいいですね。学習者を見て、深み、深化しないことが多いのが悲しいですね。私は深化というのが書くということでした。日記とか詩を書いたりとかし始めたことで深化が起きました。

発信することから逆算して体験や考察の必然性を感じていた筆者であったが、体験の内面化が重要であるとSは強調し、内面化することが訪れる時期は個々によってまちまちであると加えた。表すことの一つとして書くことが鍵になることを身をもって感じたと言ってくれたが、ただ、それを実際授業でどのように取り入れていくかということに関しては筆者もSも闇の中である。

2.3. 授業活動

S: ここで言う「語る」の定義は何ですか。

E: 先生に与えられたディスコースなどに当てはめて何かを言うのではなくて、自分で言葉を選んで、我が身にひきつけて、自分のことを発することでしょうか。それが自分の体験だったり考察だったりするんだと思うのですが、それを発していくこと。

S: 教員室での教師達の会話で、文型をどう教えるかとかこの語とこの語はどう違うかとか、これも大事なことですが、そういう話をしているのはよく耳にしますが、こういう「語る」ということを議論しているのは聞いたことがないですよ。教師側には意外や、こういう自覚はないんだと思うんです。動機文の教師側に責任があるというのは納得します。

E: ある先生が、初級のメイン(注:授業科目「総合日本語」。構造シラバスの主教材(メインテキスト)に沿ったコミュニケーションアプローチによる授業)のコマ数が減って、基礎力のないまま中級へ行く学生が増えているんじゃないか、メインのコマ数を増やすべきじゃないだろうかっておっしゃったんですけど、基礎力って何だろうと、私は「基礎力」という言葉に引っかかってしまったんです。多分その先生のおっしゃる「基礎力」って文型運用能力だと思うんです。文型の知識だけではなく、それをどこで運用するかということまでは考えてくださっているとは思いますが、それが基礎力か。例えそれを基礎力と呼ぶとしても、その力だけを初級レベルでつければいいのか。自分の言いたいことを表現する時間はなくてもいいのか。

S: でも、カリキュラムでは文型積み上げになっていますよね。Eがこの間月刊日本語に書いていた可能形指導の例がありましたけど、あれでいいんですか。(注:月刊日本語 2004年7月号「ズバリお答え!日本語Q&A」)

E: 可能形の例を出した部分の記述では、可能形を前面に押し出すのではなく面接という場を前面に出すことでめりはりのある授業が展開できるよって伝えようと狙ったんですけど、でもあれも構造シラバスが前提になっていて、私のやりたいこととは離れていますよ。あの月間日本語の原稿にもちょっと書きましたけど、本当は私は社会の中に身を置きたいんです、学習者を。

S: うん、その社会の中に置かって、どんな意味になりますか。具体的にどうい

ことなんでしょうか。例えば、初級で文型習得目標のためにタスク活動を行うとか、そういうことでは全然ないわけでしょ。

E：社会の中に目標を置くというのは、誰だか分からない人に手紙を書くという設定で作文を書くだとか、パーティーという設定で会話練習してみましようだとかではなく、こういったことは日常茶飯事でやっていることですけど、そうじゃなくて、実際に新聞社宛に投書するとか、本当にお世話になった人に暑中見舞い書くとか、教室の中で人間関係を作ってその人達との会話をしていくとか、そういうものをイメージしているんです。

スペイン語を習っている人に聞いた話ですけど、手紙を書くという宿題が出たんですって。誰に書くんですか、って先生に聞いたら、誰でもいいですよ、家族とか、って言われたって。でも家族にスペイン語で手紙は書かないし、スペイン人の友だちも特にないし、だから大好きなリッキー・マーティン宛に書くことにしたらしい。会ったことも話したこともないけど、「リッキー・マーティンさん、こんにちは」って。手紙の内容もどんなこと書くか苦労したらしい。これはスペイン語学習の目標がスペイン語学習の中に置かれてしまった例だと思います。

こういうことが続くとバーチャルリアリティの世界になり、日本語学習のために日本語学習するようなものがどんどん積み重なることになる。

日本語教育の現場ではどんなことが起こっているのか。文型積み上げが土台にあり、それをコミュニケーションという側面からアプローチする。コミュニケーションというものをどう捉えるかによっていかようにも授業を組み立てることはできるだろう。学習者の言いたいことや考えていることを置き去りにしたコミュニケーション場面を作り上げることは、その場しのぎの表面的言語の機能だけをさらうような虚しいものを感じる。社会への足掛かりとして場面作りが重要であると筆者自身長く信じていたし、恐ろしいことにそのような指導を後輩達にもしてきているが、教室の中に既に社会が存在していたり、教室そのものが社会の中にあることに気付いたのは、つい最近のことである。

S：動機文の最後にある「コミュニケーション創出」というのは、Eにとって目的なんですか、手段なんですか。

E：手段です。

S：この動機文を読んで、私自身も日本語を教える意味というものを考えました。コミュニケーションというのは手段だと私も思ったので、目的は何なのかなあ、と。日本語教育をやっている、自分も変わっていくと思うし、実際変わってきているんです。ともに、私自身も変わっていく。深みが出てきているんだと思います。

E：ことばっていうのは自己変容の一つの要素になると私も思いますが、そう考えると、子供も大人のことばの教育も同じなんですよ。

S：そう。大人が新しい言語を勉強したら、今までの自国語だけの思考みたいなものが組み替えられ、それによって深化するってことはあるんじゃないでしょうか。変容といってもいいし、自己の出発点と持続性があることを考えると「深み」とか「深化」ですよ。

E：勉強しようと思っている方は、そんなこと考えていない人が多いと思いますけど、自分が「変容していこうとか深化していこう」と思って言語を学ぶ人って少ないと思います。

S：深化が起って、それを日本語で第二言語で語ることができたら、それは喜びであって、それは大人になってから始めたとしても十分あり得ることですよ。変わっていく、広がっていく、深まっていくということですよ。

E：言語を習得するということは、深化することなのでしょうかね。

S：そう思いますよ。

E：そうですね。この間、文化庁主催の日本語教育大会へ行って、テーマは年少者だったんですけど、話を聞いていると、どれも私が今現場で抱えているような現象や問題と同じようなことが起っている。私は就学生への日本語教育が中心ですから、一応？成人です。でも就学生というのは年少者、子供なのか。20歳そこそこの学習者ですから、まだ母語の確立はされていない部分もあるでしょう。でも、話を聞いているうちに、就学生が子供だっていうことではなく、年少者への日本語教育も成人への教育もある意味同じだという気がしてきました。

その日本語教育大会でペルー人の日系3世の大学生が話をしたんです。小学生の時に来日し、日本語は母語話者と変わらないように感じます。でも自分は一体何人なんだと今でもよく考えると。日本での生活が長くなると親に宣告されてからペルー人の友達と遊ぶのはやめ、今では日本人の友達だけで、スペイン語を使う機会が減っていて、自分のスペイン語力は低下している。日本語でも分からない言

葉が未だにたくさんあって、いつも辞書を持ち歩いている、と言ったんです。その話を受け、司会者が「常に辞書を持ち歩いているなどという話は日本人の大学生にも見習って欲しいものです」と冗談を言って会場をドッと沸かせていたんですね。

確かに若者の日本語力の低下が言われていますし、大学生だって知らない語彙などあるでしょう。そして、斯く言う私自身も辞書を常に持ち歩いているんです。日系3世のペルー人の小学生時代も今も、日本語母語話者の大学生も、そして大学を随分前に卒業した私自身も、ことばを習得していく段階にあるという点では、皆同じ。一生ことばって勉強していくんだなって思いました。その過程で人間形成の一端、というか形成した完成したということはないでしょうから、常に深化が起こるわけですね。

S：教師自身も完成されたものではないし、学生と教師というある意味離れた関係だけでは、駄目なんでしょうね。そこでリアルに語り合える関係にならなければいけないのかもしれない。それが、まあどういう関係なのか……。ジャーナルアプローチみたいなものは、それに近いのかなあ……。ただそれは語る相手が教師に限られているんですよ。ホームページに日記を書くとかって最近よくありますよね。それを誰かが見て、何か書き込んだり、そのあたりにも可能性がありますかね。新聞とか雑誌とかへの投稿っていうのも、私自身興味がありますよ。

E：そういえば最近、NHKのBSディベートアワーっていう討論番組があって、毎月の討論のテーマでネット上でも意見書き込みができるようになっているサイトがあって、それに意見を書き込むのを授業でやってみたりしました。

S：私も学生の頃は作文って好きじゃなかったんですけど、今でもワープロじゃないと戯曲は書けない。下書きはノートに汚く殴り書きして、それをパソコンで打っていくんです。そうするとパソコンで書くときの思考とノートに書くのと違う。パソコンのほうが、より生きた言葉に近い。学習者もパソコンをツールとすると、いいかもしれません。あと、Eがやっていた情報番組を作るっていう授業(注：テーマ決め、取材、ビデオによる撮影、編集、発表を行う協働学習)も、私もやってみたいと思いましたね。メディアリテラシーの。

E：メディアリテラシーのほんの一部ですけどね。だけど、あのときはコミュニケー

ジョンが創出されたという実感を得ました。学習者は自分達でテーマを決め、それについていろいろな人に取材する。その一つ一つの段階で考察が伴っているんです。だから発表会で一般聴衆が質問したとき、自らの言葉で答えた。それを受け、さらに聴衆が考えを述べ・・・という具合に、学習者の発信からコミュニケーションが巻き起こったような状態になったんですよ。何故一方向的でなかったり、単発的一往復の質問に対する回答のような形に留まらなかったかは、そこに学習者の「体験と考察」があったからだと思ったのですが。

S：そうですね。

メディアリテラシーにもいろいろあるんですね。やってみたいですね。

E：初級段階からできるといいですよね。

S：教師って「日本はこうですけど、中国ではどうですか」とかって学習者の国について質問することが多いですよね。そうじゃなくて「あなたはどうか」であるべきですよね。初級段階からそういうことはやっていけますよね。

E：初級から自分の言いたいことを言うという要素はどんどん入れていきたいですよね。習得した言語をリアルに語る場を提供することが教師の役割と言えるかもしれません。

S：Eはよく目標を決めるよう言いますよね。目標は何だ、って。その目標がリアルにできればできるほど、いいのでしょうね。

筆者自身が日系ペルー人の話をしながら思い至ったのは、誰もがことばの学ぶ過程にあり、コミュニケーション創出をしたいと欲する気持ちが又ことばを学ぶ力になるのではないかということだ。ことばを学ぶことで人との繋がりを作っていくと同時に、過去の自分を未来に繋げていっているのではないだろうか。Sはそれを「深化」と呼んだ。さらにSは母語である程度組み立てられている思考が第二言語を学ぶことで深化する可能性を述べていた。つまり母語では味わえない深化があるということだ。これは外国人に対する日本語教育をする立場の私達に、限りない可能性が示されたように感じた。

■ 3. 結論

誘う・苦情を言う・丁寧に断るなどコミュニケーションを円滑に遂行することを主目的とした日本語教育が浸透している。これは学習者の生活上での急事に対応するため定着してきた。学習者は日本語でのコミュニケーションを円滑にすることでコミュニティを少しずつ広げ、人と人とのつながりを形成していくのである。しかし一方で学習者の創造や思惟はプライオリティを失う。

自らの創造や思惟がからんだ語りを社会の中で発信することで、個々人の横の繋がりを新たに広げ、より強固に存在を社会に据えることができるのではないだろうか。さらに、自らの創造や思惟がからんだ語りの発信は、個々人の過去・現在・未来という縦の繋がりを形成していくのではないだろうか。

今回の対話から「動機を作る」と「授業（活動）のリアルさ」という二つのキーワードを得、上述のように思うに至った。

私が動機文で触れた学習動機とは日本語学習を始めるきっかけとなったもの、何故日本語を習得しようとしたのか、という学習の前段階についてである。支援者の共に学習動機を作る必要性を説く対話相手Sだが、この学習動機と私の言うそれとは視点が違う。Sの言う学習動機は、(何度か「喜び」という語を口にかけていることから伺えるが)日本語を習得していく上での喜び、つまり学習過程の心情に目が向けられている。したがってSの「学習動機を作る」とは、「喜び」の要素を支援活動の中に入れることであり、この「喜び」が動機となる。確かに支援者は学習者の学習開始前の動機に拘束されるべきではない。そのような立場からもコミュニケーション創出の力をつけることを主眼とした支援活動を設計したいと考えていたが、設計上、学習者の心情は従属するものとして扱い、前面に発現させることはなかった。そこに「学習者の喜び」を投じる視座になるほどと唸る。他者に伝えたいという思いが動機になると

考えていたが、伝えた結果に喜びがなければ次の動機は生まれない。学習者と対峙した支援活動として、学習者の心理を裏面に潜ませた授業設計では不十分であろう。また体験を内面化して初めて語ることができる。この体験の内面化が十分に成されないと、自らの創造や思惟がからんだ自ら選んだことばの発信はできない。喜びもない。こうして今私自身レポートを書くことで同時に内面化していると言えるが、体験の内面化は一朝一夕でできるものではなく時間を要するものだろう。しかし、深化が生じることになるのだ。

以上のようなことから、学習動機を作るとは「体験の内面化→語りの発信→喜び」と表わすことができ、結果深化を伴う。これを授業や教室で行う場合、「授業（活動）のリアルさ」が問われる。コミュニケーションアプローチの場面の中での運用重視が流布したことにより、教師は会話使用の場面作りに躍起になる。そして教室や支援の場そのものが社会だということが忘れられてしまった。教室や日本語教育の場は社会の中に存在するものだし、教室そのものの中にも日本語習得を目指す者たちが集まった社会が存在しているのだ。授業や教室という場そのものがリアルであることと内容やそこで表現されることがリアルであれば、（コミュニケーションを円滑にするための語学教育に留まらず、）その社会でコミュニケーションが巻き起こることになり、それがまた相互の深化を生む。

つまり「体験の内面化→語りの発信→喜び」の段階をリアルに経れば経るほど、個人々の存在が社会に据えられ[横の繋がり]、且つ、成長過程にある個人々がアイデンティティを共に深化させ未来へと繋ぐ[縦の繋がり]教育となるのだ。コミュニケーション創出の力とは、上記のような横と縦の繋がりを形成し立体化していくことと言えよう。言い換えれば、横と縦の繋がりを立体化させる要素を含んだ“体験・考察・発信”を軸とした活動をすることで、コミュニケーション創出の力を持つ主体を育成する支援を展開したいと考える。

■ 4. おわりに

今回の事前レポートを執筆するにあたり、動機文を提示しそれについて対話をする
ことで、お互いの思惟をからませた本物のコミュニケーションが創出される経験を身
を持ってすることができた。段階を経て課題を進めていくことで、漠然としていたも
のが徐々に形作られていき、“私のもの”や“対話相手のもの”となっていくのを体感
した。これが「喜び」への布石であろうか。

書いていく際、幾つか不安が生じた。一つは対話相手の選択である。対話するに当
たりなぜ日本語教育を目指すかという主旨で対話できる相手はそう多くはない。更
に本レポートを書く意義を理解し同じ方向を見ている人でないと対話相手としては厳
しいだろう。二つ目は対話内容が多岐にわたってしまったこと。あらかじめ幾つかの
項目にしぼり、両者がそれを了解しておくべきだった。実際、対話内容で授業形態に
ついてなど、とりとめもなくなってしまった部分が相当ある。三つ目は結論に一貫性
を持たせることだ。これが一番苦労した点でもある。書きたいことがたくさん出てく
るのだが、それを順序・理論立てることが難しい。自分の言いたいことが結局不明瞭で、
何をアピールすればいいのか見失ってしまった。しかし対話内容から気付いたことを
書くことで、さらにそれを整理し、深め、記述し、少しずつ発見していく自分は「体
験の内面化」をしているのだった。満足のできるレポートでないことに力不足を実感
するが、未だその過程にある証拠でもあろう。

対話相手 S 氏の冗談めかして言った「日記を書いて自分と語っている」という言葉
が今強く残る。発信するからには発信相手がいるべきで、それは目の前にいる人であ
ったり社会であったりすると考えていたが、その前段階で「自分と語る」ことの重要性
を考えるきっかけとなった。今後の研究活動のヒントになるだろう。私は対話相手に
恵まれた。S 氏に心から感謝申し上げたい。